名古屋市の被害

名古屋市域の震度は現在の６～７相当だったと推定されています。また液状化現象も各地で発生しており、当時の様子を伝える以下のような記述が残っています。

　織豊村（※現中村区）では池水溝渠等の水は泥水変じて増水、鳴海町では井水が１～２ｍ以上も増水またはあふれ出し、赤土濁となったが、３日後に半減、１週間で復元した。岩塚村（※現中村区）の一井戸は微温湯となり翌日冷却した。柳森村（※現中村区）地内の井水は悪臭を伴ったという報告がある。下ノ一色村（※現中川区）井水悉く泥水、砂水を噴き上げ砂泥１.５ｍくらいの噴出の個所多く、また亀裂は長さ約２００ｍ、巾約１.８ｍ、深さ１５ｍほどのものができた。

　名古屋市では城西（※現西区）長堤で６～７箇所泥砂噴出、巾下（※現西区）上宿辺で亀裂・噴砂水あり、砂水４.５ｍ以上も噴出し一時は猛烈であったという。また堀川は増水した。溜池の破堤が各村で見られた中でも田代村（※現千種区）の猫ヶ洞（※周囲約２.５km の大溜池）の堤防が崩壊して、一時人家耕地数 10ha に浸水し田代村では人家一むねが流出した。

飯田汲事 編『濃尾地震文献目録』愛知県防災会議地震部会、1978 p.105 より引用
※部分は作成時に追加

＜名古屋市の被害状況＞

人的被害	死者	１９０人
	負傷者	４９９人
住宅被害	全壊	１２６１棟
	半壊	１６０３棟
	破損	３１３５棟
非住家被害	全壊	８４８棟
	半壊	８０３棟
	破損	９５９棟

出典：名古屋市における既往の地震とその災害

濃尾地震後の名古屋城

石垣や土塀が一部崩壊している

写真出典：岐阜地方気象台

名古屋市の土地は「沖積層」と言って、比較的時期の新しい、弱い地盤の上に広がっているんだる～。

濃尾地震　名古屋市港防災センター